

令和 6 年 6 月 17 日現在

機関番号：34409

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2023

課題番号：20K03187

研究課題名(和文) ネットいじめに留意したファシリテーターとしてのICT活用教員研修プログラムの開発

研究課題名(英文) Development of a Teacher Training Program for Utilizing ICT as Facilitators for Preventing Cyberbullying

研究代表者

今田 晃一 (IMADA, KOUICHI)

大阪樟蔭女子大学・学芸学部・教授

研究者番号：40342969

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)： ネットいじめ防止を題材とした教員研修用のプログラムを開発し、複数の学校および教育委員会で実施した。ICT活用とファシリテーターとしての教員の在り方を検討することを目標として設定して取り組んだ。NHK for Schoolの動画活用(ネットいじめ)、即時アンケートであるMentimeterなどの活用。さらに、学習評価につながるR80形式による振り返りシート(2段落、接続詞)が、スタディログ(学習履歴)の活用方法として有効であることが明らかになった。

また、スプレッドシートの学習者各自のカスタマイズについては、GAS(Google Apps Script)の可能性を提案し、反響があった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ネットいじめ防止の題材として、LINEによるグループはずしの内容を選んだ(NHK for School、ココロ部)。ここでは炎上している状況において、スマートな仲介者としてのコメントを書くことを課題とした。それによって言葉への拘りが高まり、他の人がどのようなコメントを書いているかという対話的な学びの必然性も演出できた。何より情報モラル教育は、禁止事項を教えるといういわゆる暗転型の学習を超える可能性を示したことの意義が大きかったと考える。

また、ファシリテーターとしての教員の在り方も、即時アンケートであるMentimeterを各学校のLMSと併行して活用することでスタディログの多様性も示せた。

研究成果の概要(英文)： We have developed a teacher training program with a theme of cyberbullying prevention and implemented it at multiple schools and education boards. The program was conducted with the goal of discussing how teachers should utilize ICT as facilitators for the prevention. Videos on NHK for School (regarding bullying through LINE and other Internet apps), Mentimeter, which is a real time questionnaire, and other relevant resources were leveraged. In the course of the research, the reflection sheet in the format of 'R80' (conveyance of a message using a conjunction in two paragraphs), which is designed for academic evaluation, proved to be effective as a method of using the Study Log (learning records).

Furthermore, our proposal for the potential application of GAS (Google Apps Script) to customizing the spreadsheet received numerous responses.

研究分野：教育工学

キーワード：ネットいじめ ICT活用 ファシリテーター 学習評価

1. 研究開始当初の背景

報告者らは、教員の ICT 活用指導力向上のための教員研修プログラムの開発と実践を、「情報モラル」を主な題材として研究と実践に取り組んできた。ところが、2015 年頃よりいわゆる LINE が急速に児童にも普及し、それにとまなう「ネットいじめ防止」が緊要性のある課題となった。そこで 2016 年度埼玉県越谷市教員委員会の要望により市内全校対象で行った実態調査を基に、「ネットいじめ防止」、特に LINE を題材とする ICT 活用の教員研修プログラムを開発し、実施した。結果、教員研修の構成 3 要素の上位概念と考える「倫理・使命感」に関して成果が認められ、さらに実践へとつながった教員の報告事例も有意に増加した。

また本研究の開始年度である 2020 年度は、時期的にも新しい学習指導要領が施行される時期でもあり、「主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）」からの授業改善が緊要性のある課題としても注目されだした時期であった。さらに新型コロナウイルスの影響で、自宅におけるオンライン授業にも対応しなければならない現状であった。

これらの課題について検討するとともに、新学習指導要領では、ティーチングからコーチングという教員の心構えについても文部科学省だけでなく、内閣府からのメッセージが発信されたという事情もあり、研究テーマに「ファシリテーターとしての教員の在り方」の文言を挿入した。

2. 研究の目的

本研究の目的は、「ネットいじめ防止」を題材とした ICT 活用指導力向上のための教員研修プログラムの開発、およびその評価（実践後の児童生徒の変容を含む）を経ての更なる改善である。教員研修後、そこで得た知識および技能を活用して、教員が「ネットいじめ防止」の授業実践を行う。単なる ICT 活用指導力を測定するだけでなく、その学習が児童生徒の実際のいじめ防止（当事者意識の涵養、行動の変容）につながったかどうかを追跡調査し、その授業評価および分析の結果を元の教員研修プログラムの更なる改善につなげる。

「ネットいじめ防止」を題材とすることで、教員研修の構成 3 要素の土台とも言われる人間性（倫理・使命観、内面的動機等）に関する項目が喚起され、実践への促進要因となっている、とする本研究の仮説を統計的に検証する。下記に示す①～④の 4 つの視点より、本研修の独自性と創造性に触れながらその目的について言及する。

①ICT 活用指導力の向上のための教員研修プログラムの独自性

開発した教員研修プログラムは、各教員が最新の LINE の状況を理解しながら研修で提供する映像教材（筆者ら作）を基に、各自の学校および学級の状況に応じてカスタマイズする課程で ICT 活用の指導力が向上できるように工夫してある。特に映像教材の作成には、デジタル・ネイティブである大学生の協力を得ることで、LINE などの最新の状況、情報等を適切に提供できるものとなっている。この世代は、ファシリテーションにも優れた資質を有する。

②ICT 活用教員研修の構成 3 要素の土台となる倫理・使命観（内面的動機・人間性等）

研究代表者の今田は、ICT 活用の教員研修を行う際に、技能（ICT 活用）、知識（新学習指導要領）、倫理・使命感（内面的動機・人間性等）の 3 つをその構成要素として提示して

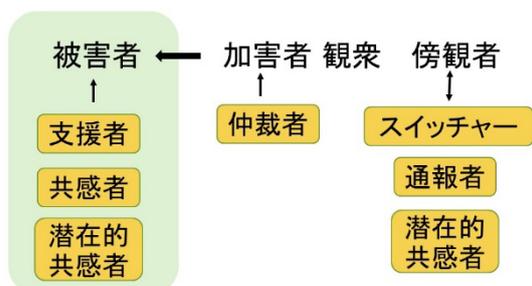
いる。単に ICT 活用の技能と知識を向上させても、なかなか実践につながらないのが現状であり、逆に取り組む題材が教員の使命感を刺激する適切なものであれば、教員としての倫理・使命観が喚起される。それは研修後の実践への意欲を促進する要因ととらえている。研修後、土台となる教員の倫理・使命観に留意した省察的評価が本研修プログラムの特徴であり、教育ファシリテーターとも整合性を有するものである。

③いじめ防止への効果

教員研修プログラムでは、児童生徒に人権意識と対人トラブル回避解決の力を身に付けさせる具体的な事例についても学ぶ。森田洋司氏は「いじめの四層構像図」として観衆、傍観者の存在を明らかにしたが、現在は「いじめ指導の方向転換として被害者を支える支

援者、共感者の存在が重視されている。本研究では、ICT を活用して LINE によるネットいじめシミュレーション教材を開発した（研修で提供）。ここではさらに「スイッチャー」という書き込みだけで LINE 全体の場の雰囲気を一気に好転させる存在に注目し、対人トラブル回避解決トレーニングの一環として児童生徒に取り組みさせる。左図に示すように、今まで何もしない傍観者であった自分（ほと

いじめの構造といじめ対策の役割



んどの児童生徒）が、スイッチャー（書き込みによる場の転換者：スマートな仲介者）は、いじめの状況に対して、自分でも何か具体的な行動、役割が担えることを理解させることで、いじめに対する当事者意識を涵養できることを想定した申請者ら独自の命名である。上図は、傍観者におけるスイッチャーの位置づけの構想図である（研究代表今田作）。

④アクティブ・ラーニングを促進する ICT 活用のためのファシリテーターの在り方

学習者の主体性を導き出すためには教え過ぎない、質問に対しては答えではなく質問で返す、などファシリテーターとしての基本的な理念と技能を習得することが、Society5.0、新時代の教員には必要な資質・能力と考える。LINE の書き込みを想定した本研究で取り組む題材は、教員のファシリテーションと児童生徒の主体性を自然に促進するものとして工夫した。その際、学習評価として、「主体的に学習に取り組む態度」の評価も重要となる。それに関しては、「R80」という「主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）」を振り返り、再構築するという目的から中島博司校長が考案した2段落、接続詞の形式による振り返りシートを用いることとする。このRは、Reflection（リフレクション）とRestructure（リストラクチャ）の2つのRであり、自己調整学習にもつながる視点を有するものである。

3. 研究の方法

GIGA スクール構想のもと、新しい学習指導要領に基づいた一人一台端末を前提とした ICT 活用のモデルとなる授業アイデアの構築と改善を最初の2年間で行った（今田、2020）。そこで研究最終年度である本年度は、報告者が文部科学省学校 DX 戦略アドバイザー委員である立場からも「ICT を活用した主体的・対話的で深い学びの実践とその評価」の充実について特別授業の提案およびそれを基にした教員研修を複数回行った。

さらに埼玉県幸手市教育委員会（以下「幸手市教委」と略す）からは、市の ICT 活用の

現状と課題を鑑み、「ICT活用に対して新たな知見とその魅力を実感できる場（研修）を提供することによって、実践への積極的な意欲を喚起する。その際、学習者の主体性を涵養するために必要な教師としての心構え（ファシリテーション）とそのための実践的な留意点（自己調整学習に留意した学習評価）等を理解し、身に付けること」を教員研修の目的とした。しかも研修は単発ではなく、系統的な内容で全3回（9月、11月、12月）の計3回実施することとした。この3回の研修の成果を、本研究の総括的な成果として下記に報告する。

4. 研究成果

(1) 教員研修の概要とその成果

9月、11月、12月の各研修の概要について以下の表1、表2、表3にまとめる。

表1 第1回（9月）研修の概要

テーマ	特別授業「ネットいじめを防ぐためにできること」（授業の実演）		
日時	2023年9月3日 10:30~11:50		
対象	埼玉県幸手市立さかえ小学校教員 埼玉県幸手市立幸手中学校教員		
(参加者内訳)	参加者合計 59名（小学校教員36名、中学校教員23名）		
形態	オンライン（ZOOM）		
項目	内容	分	留意点（キーワード）
特別授業	特別授業「ネットいじめ防止を考える」を実践。小学校3クラス、中学校8クラスの計11クラスに同時中継し、オンラインゲスト講師を授業で紹介。教師によるファシリテーターの必要性を実践を通して提示。	前半 40	新しい時代のコミュニケーション いじめ防止対策推進法 いじめの構造、スイッチャー NHK for School「コロ部」 即時アンケート（Mentimeter）
	人生100年時代に必要な学びや新しいコミュニケーションの在り方を解説。ネットいじめに遭遇した当事者が即時に求められる対応を考え書き込む体験。異学年間での意見共有。	後半 30	スイッチャー：アサーション 異校種・異学年の意見共有 これからの時代、特に非対面が必要なコミュニケーション能力について検討 いじめの構造を再考、特に「傍観者」の在り方について討議
研修の特徴を表す図表			

表2 第2回（11月）研修の概要

テーマ	ファシリテーターとしての教師の在り方		
日時	2023年11月24日 15:15~16:30		
対象	(1) 埼玉県内公立小・中学校等の教職員、独立学校の教職員 (2) 埼玉県内市町村教育委員会の指導主事等		
(参加者内訳)	参加者合計 60名（小学校教員33名、中学校教員27名）		
形態	オンライン（ZOOM）		
項目	内容	分	留意点
実践報告	代表2校（小学校1学、中学校1校）より、第1回研修後の授業実践発表。	30	中学校：ネット上のコミュニケーション力の向上。 小学校：多様な生命・価値観の尊重
特別授業の解説	発展授業の事例紹介。ICT活用と各場面における教師のファシリテーターの役割の意味について説明。	10	対面、遠隔授業の融合 R80による振り返り 学習履歴（スタディ・ログ）
いじめ予防教材 村上春樹 『沈黙』	村上春樹『沈黙』のいじめ予防教材としての活用を解説。動画と個別での読み込みの使い分け、傍観者からの観点を促す視点を提供。	10	「沈黙」集団読書テキスト 高校教師によるYouTube動画 いじめの構造：傍観者「村上春樹」アンソロジー
ICTスキル講習 即時アンケート 「Mentimeter」	アンケート作成ツールmentimeterの活用について解説。機能と特徴の紹介と活用事例の紹介。アンケート作成、集計、表示の方法を実演。	10	即時アンケート 無記名、履歴なしの学習履歴の意義 深い立場の声を聞く 思考スキルICTツール
教師の役割	主体的な体験を誘発する教師の在り方（ファシリテーター）を説明。学習者の主体性を高めるための留意点について整理し提案。	15	内閣府教育人材育成政策 Teaching+Coaching 指導および支援に関する4つの形態 学習者の自己調整能力
研修の特徴を表す図表			

表3 第3回（12月）研修の概要

テーマ	ICTを活用した主体的・対話的で深い学びの実践と評価		
日時	2023年12月25日 14:45~16:15		
対象	幸手市内の小中学校教職員		
(参加者内訳)	参加者合計 59名（小学校教員36名、中学校教員23名）		
形態	対面		
項目	内容	分	留意点
GIGAスクール構想のねらい	自己調整学習、論理的思考、人生100年時代の学びのスタイルについて解説。	20	一斉一律一回限りの授業から脱却 隙間時間にネットで学ぶ 動画で学ぶ
プログラミング教育の展開	プログラミング教育の展開として、論理的思考につながる「プログラミング的思考」を育むことを主眼とした活動を提案。NHK放送番組「テキシコー」の紹介。	20	プログラミング的思考 分解・総合せ・一般化・抽象化 NHK for School「テキシコー」 アンブラッド教材
「R80」による振り返り活動の充実	R80形式の振り返りを紹介し、自己調整学習への接点を解説。文章を書くための接続詞指導の重要性とMentimeterによる練習問題を実施。	20	40字・2文・接続詞でつなぐ 思考スキル×ICTツール 自己調整学習 学習評価（情報面）への活用
自己調整学習と教員による学習評価	ジマーマンらの論説を紹介、R80との整合性を解説。振り返り活動と論理的思考力の育成による自己調整学習の充実および高校の事例から評価観点を説明。	20	自身の学習過程への関与 R80形式の振り返りシート 自己反省 学習評価 「探究」活動
振り返り	受講者のR80による振り返り	10	オンラインアンケート、R80形式
研修の特徴を表す図表			

(2) まとめと今後の課題

本稿では、GIGAスクール構想におけるICT活用の実践がある程度定着した現状の中で、幸手市教委より更なる実践の充実を求めて教員研修の依頼があった。研修は単発ではなく、系統的な内容で3回行い、その目的を、「ICT活用に対して新たな知見と魅力を実感できる場（研修）を提供することによって、実践への積極的な意欲を喚起する。その際、今後教師に必要な心構え（ファシリテーション）とそのための実践な留意点（自己調整学習に留意した学習評価等）を理解し、身に付けること」として取り組んだ。

①成果

第一に、研修会の満足度は高く、受講者は積極的に参加した。また、研修内の活動はICT活用に関する新たな視点と魅力を発見し、校内のICT活用の推進に対する意欲を喚起するものになった。

第二に、研修後に参加の全教員へのアンケートについて行ったクラスター分析の結果からも、「論理的思考の重要性」「子どものためにやる」「R80形式の可能性」の3つが認められた。「子どものためにやる」とは、学習者の主体性を涵養するために、事前にできるだけ準備を行い、取り組む必然性を実感できる状況の設定に留意すること。これはファシリテーターとしての教員の在り方に関連する視点である。講義においては、Mentimeter等、ICT活用の実技を加えることでより実践的な視点での意欲を喚起することができたと考えられる。またR80形式、すなわち2文または2段落接続詞による振り返りシートの提案は、「主体的に学習に取り組む態度」を評価する際に活用可能な具体的な手法として教師たちに受け入れられたと考えられる。

また、このようなR80形式の振り返りシートによる観点別学習状況の評価のルーブリック作成という手法が、主に高等学校の実践から始まっていることも、小中の教師にとっては興味深かったようである。小中学校の先生方は、高等学校および大学でどのような学びが重視されているのかについて意外と興味をもっておられることも新しい発見であった。また、GIGAスクール構想においては、学習履歴（スタディ・ログ）の活用は重要なテーマであり、その関連からもICTを活用した学習評価の在り方をさらに追究したい。

以上のような結果より、研修の目的である「ICT活用に対して新たな知見と魅力を実感できる場（研修）を提供することによって、実践への積極的な意欲を喚起する。その際、学習者の主体性を涵養するために必要な教師としての心構え（ファシリテーション）とそのための実践な留意点（自己調整学習に留意した学習評価等）を理解し、身に付けること」については、全3回の研修を通じて概ね達成できたと考える次第である。

②今後の課題

取り組んだ研修は、複数回実施することで受講者が系統的かつスモールステップで目標に到達できるよう工夫した。その結果、1回または2回の参加者は、すぐに役立つ技能の習得や実践的なアイデアを成果として捉えており、第2期GIGAスクール構想に対応したい。

参考文献

今田晃一・村山大樹・奥澤智志・二橋拓哉・佐藤静 「『ネットいじめ』に留意したファシリテーターとしてのICT活用教員研修プログラムの実践報告 - 埼玉県幸手市教育委員会主催による全3回の教育研究の成果を中心に」大阪樟蔭女子大学『樟蔭教職研究』8巻、69-78頁（2024年3月31日発行）。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計11件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 今田晃一・村山大樹・手嶋将博	4. 巻 13巻
2. 論文標題 教職課程におけるICT活用指導力に関するカリキュラムマップの作成：新教科「情報通信技術を活用した教育に関する理論及び方法」を中心として	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 大阪樟蔭女子大学_研究紀要	6. 最初と最後の頁 87-94
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 村山大樹・今田晃一	4. 巻 Vol.15, No.1
2. 論文標題 「保育者養成課程版『ICT活用指導力チェックリス』の検討」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 文教大学大学院教育学研究科『教育研究ジャーナル』	6. 最初と最後の頁 9-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 村山大樹・今田晃一	4. 巻 Vol.15, No.2
2. 論文標題 「生徒指導提要」（令和4年12月改訂版）に関する一考察～いじめ・不登校支援における村上春樹『沈黙』の教材価値の再考～	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 文教大学大学院教育学研究科『教育研究ジャーナル』	6. 最初と最後の頁 1-5
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 今田晃一	4. 巻 2月号
2. 論文標題 「令和の日本型学校教育」で求められるファシリテーターとしての教員の在り方	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 学校とICT、Sky株式会社ICTソリューション事業部	6. 最初と最後の頁 12-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 今田晃一・手嶋將博	4. 巻 第30号
2. 論文標題 「Society5.0 for SDGs」を題材とした探究的な学習の課題に関する一考察 ～「数理・データサイエンス・AI教育プログラム（リテラシー）」における実践を想定して～	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 文教大学教育研究所紀要	6. 最初と最後の頁 21-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 今田晃一・上出吉則・佐藤静	4. 巻 第12巻
2. 論文標題 教職用新設科目「数理・データサイエンス・AI教育プログラム（リテラシーレベル）」に関する一考察 「令和の日本型学校教育」を手掛かりにして～	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 大阪樟蔭女子大学紀要	6. 最初と最後の頁 89-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 手嶋將博・今田晃一・村山大樹	4. 巻 Vol.14, No. 2
2. 論文標題 「情報通信技術を活用した教育に関する理論及び方法」の学修内容の検討 —「数理・データサイエンス・AI教育プログラム」との整合性より—	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 文教大学大学院教育学研究科『教育研究ジャーナル』	6. 最初と最後の頁 17-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 村山大樹・今田晃一	4. 巻 Vol.14, No. 2
2. 論文標題 保育用数理・データサイエンス・AI教育プログラム(リテラシーレベル)の検討- 幼児向けプログラミング活動及び領域「環境」の内容を手掛かりに-	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 文教大学大学院教育学研究科『教育研究ジャーナル』	6. 最初と最後の頁 33-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 手嶋将博・今田晃一	4. 巻 Vol.13-No.2
2. 論文標題 GIGAスクール構想を想定した教職課程科目の実践～デジタル・ネイティブ世代の特性を生かして～	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 文教大学大学院教育学研究科教育研究ジャーナル	6. 最初と最後の頁 13-17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 手嶋将博・今田晃一	4. 巻 第25号
2. 論文標題 教職課程科目におけるオンライン授業の在り方に関する一考察～GIGAスクール構想』を想定したシラバスの実践より～	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 文教大学湘南総合研究所湘南フォーラム	6. 最初と最後の頁 127-136
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 今田晃一	4. 巻 Vol.55-2
2. 論文標題 教育の目: ネットで学ぶ, 人生100年時代の学びの作法」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 開隆堂出版KGKジャーナル	6. 最初と最後の頁 14-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 今田晃一・村山大樹
2. 発表標題 教職課程における ICT 活用指導力に関するカリキュラムマップの作成 「情報通信技術を活用した教育に関する理論及び方法」を中心として
3. 学会等名 日本学校教育学会 第36回研究大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 村山大樹・今田晃一
2. 発表標題 教員・保育者養成課程におけるICT 活用指導力向上に向けたカリキュラムの検討 教職課程コアカリキュラムに示されたICT 活用関連項目の整理
3. 学会等名 日本学校教育学会 第36回研究大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 今田晃一・手嶋將博・木村慶太
2. 発表標題 GIGA スクール構想における探究的な学習課題に関する一考察 ～「Society5.0 for SDGs」を手掛かりにして～
3. 学会等名 異文化間教育学会第42回大会および日本国際理解教育学会第30回研究大会合同大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 砂川真璃・木村慶太・今田晃一
2. 発表標題 DGs の意識を涵養する社会科地理分野のカリキュラム開発～プログラミング的思考法を活用したグループワークを通して～
3. 学会等名 異文化間教育学会第42回大会および日本国際理解教育学会第30回研究大会合同大会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	村山 大樹 (Murayama Taiki) (90721671)	帝京平成大学・人文社会学部・講師 (32511)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------